

# 中山間地の独居高齢者はどう支えられているか？

武田みゆき<sup>1)</sup>、渡部ちひろ<sup>2)</sup>、太田龍一<sup>3)</sup>

**要 旨：背景：**高齢化に従い、独居高齢者の問題が顕在化している。独居は健康状態を悪化させる可能性が示唆されている。社会資源が乏しい僻地では、独居高齢者の問題に十分対応できていない可能性があるが、僻地・中山間地域独居高齢者の支援や支え合いの現状は不明である。今回、中山間地域独居高齢者の地域での支援を、フォーマル、インフォーマルの枠組みから調査した。

**方法：**雲南市大東町幡屋地区住民 14 名を対象に、アンケート及び個別インタビューを行い、その逐語録の内容分析を行った。

**結果：**近隣住民が夜間の点灯や、サロンへの参加などで見守る「生活の一部としての見守り」、デイサービスなどのフォーマル、サポートや配食サービスなどのインフォーマルサポートでの「生活支援による見守り」、性格や家庭環境など「独居の背景」の 3 テーマが抽出された。

**結論：**中山間地域独居高齢者は、地域住民の生活の中で見守られていた。多様な背景を持っており、多様性を考慮した支援が必要である。

**キーワード：**独居高齢者見守り、フォーマル、インフォーマル

(雲南市立病院医学雑誌 2022 ; 18(1) : 印刷中)

## はじめに

わが国の高齢化率は、1994 (平成 6) 年に 14% を超え、2018 (平成 30) 年には 28.1% となっている。併せて家族形態が変化し独居世帯が増えており、とりわけ高齢者の独居世帯が増加している。独居世帯は生活上のリスクが高まり、独居高齢者においては健康に対する影響が大きい。食事ができず、薬が飲めないことがある、なかなか受診につながらない、など健康状態の悪化につながる可能性がある。また、緊急時の対応など課題も多い。僻地・中山間地域においても、高齢者世帯・独居世帯が多くなったとの印象もある。中山間地域においては、社会資源が乏しく支援体制が十分に整っていない現状がある<sup>1)</sup>。支援体制が十分でない、病状が悪化し重症化したり、また、認知症が進行し住み慣れた地域での生活が困難になったりすることが考えられる。

雲南市幡屋地区でも、僻地・中山間地域での独居高齢者の支援や支え合いに関する現状を明らかにした、記

録として残る研究報告はない。今回は、雲南市の地域医療を進める上で、中山間地域での独居高齢者の生活支援についてフォーマル、インフォーマルの枠組みから調査することを目的とした。

## 対象と方法

本研究は、雲南市大東町幡屋地区の住民を対象としたアンケートならびに個別インタビューを解析した横断研究である。対象者サンプリングは合目的的サンプリングで、データ解析は、研究者 3 名で、逐語録の中からコーディングしてインタビュー内容を概念テーマごとに分類した。

研究対象者は、地区の住民 14 名とした。うちわけは、アンケート対象者が地区在住の介護保険事業所管理者等 40 代～60 代の女性 6 名、インタビュー対象者が自主組織の構成員や地域住民 13 名で 40 代～70 代の男女 (うち女性は 7 名) であった。

1) NPO 法人ほっと大東ケアプランほっと、2) 雲南市立病院看護部、3) 雲南市立病院内科・地域ケア科  
著者連絡先：武田みゆき NPO 法人ほっと大東ケアプランほっと [〒699-1251 島根県雲南市大東町新庄 283-1]  
電話番号：0854-43-8008 Fax：0854-43-8007

E-mail：hottoman@hotaru.yoitoko.jp、hospital-soumu@city.unnan.shimane.jp

(受付日：2021 年 11 月 16 日、受理日：2022 年 1 月 25 日、印刷日：2022 年●月●日)

## 幡屋地区について

雲南市の山間部に位置し、交通の便が悪く社会資源が乏しい。人口は2017年時点で1,515人、2012年～2017年の5年間に3.5%減少している。反して高齢化率は32.36%から36.63%に増加、生産年齢人口は55.56%から51.68%に減少している<sup>2)</sup>。

住民基本台帳上の一人世帯高齢者（以下、独居高齢者）は、大東総合センターからの聞き取りによると、2018年時点で60名、そのうち民生委員などの情報から実際には同居者がいると判断された所謂「名目独居」を除外した実質独居高齢者<sup>3)</sup>は26名だった。雲南広域連合による聞き取りでは、23名が介護認定を受けている。しかし、大東町包括支援センター及び大東町内の居宅支援事業所からの聞き取りでは、介護保険サービス利用者は2名で、いずれも訪問介護を利用している。民生委員からの聞き取りで、介護保険外では社会福祉協議会の配食サービス利用者が2名であった。

## アンケート及びインタビュー内容

アンケートについては、地域住民を対象に「あなたの住む幡屋地区はどんなところですか？」「暮らしの中で感じる不便を教えてください」「今後考えられる医療に関する問題点を教えてください」、の3つに絞って行った。アンケートを行った中で、医療に関する問題点として、高齢者世帯・独居世帯が増え、見守りが必要との意見があった。そこで、「独居高齢者について何が心配か？」「緊急時にあったことがあるか？」についてインタビューを行った。

## データの分析の方法

地域住民のインタビュー結果をもとに、自主組織の構成員に協力を得て、逐語録の内容について共同研究者とともにテーマ分析を行った。地区内の独居高齢者の生活実態と、それを支える独居高齢者の見守り体制を明らかにするために、対象者へのインタビューを行い、その内容に対して分析を行った。インタビュー内容をボイスレコーダーで録音し逐語録を作成した。その逐語録を主研究者と副研究者それぞれが熟読してその内容に熟知した上で、独立してコーディングを行った。コーディング内容から、地域の独居高齢者の見守り体制に関係する内容について、コーディングをもとに概念を抽出し、それぞれの概念のつながりを研究者間で議論した。それを通して、同類の概念をまとめ、データを抽出した。抽出された概念ならびにテーマに関して全研究者で議論を行い、トライアンジュレーションを行った。

## 倫理的配慮

対象者に、当研究を行うことと、当研究において個人情報全て匿名化され特定できない状態になっていることを周知し、対象者全員に同意を得た。当研究は雲南市立病院臨床倫理委員会の承認を得ている（雲南市立病院倫理委員会 No.20200003）。

## 結 果

内容分析の結果、生活の一部としての見守り、生活支援による見守り、独居の背景の3つのテーマが抽出された。

### 1. 生活の一部としての見守り

僻地・中山間地域では、住民同士のつながりが強く、日常生活の中で隣人との接点が多かった。その中で自然に隣人の状況について把握していた。その状況に合わせて自然な声かけが行われていた。また多様な生活スタイルにわせて、住民間の多様な見守りが行われていた。近隣住民の生活の中の一部として独居高齢者の生活の見守りが行われていた。インタビュー対象者の発言を一部抜粋する。

「夜は電気がつくと安心する。」

「なんとなく気にかけていた。」

「サロンなど集いの場に出ないと心配。」

「地域の中でも遠慮があって優しく見守っている。」

### 2. 生活支援としての見守り

介護保険を主としたフォーマルとインフォーマルのサービスを使った見守りが行われていた。配食サービスの際やデイサービスなどでの地域の人間関係の構築、並びに、配食サービスによる直接観察による独居高齢者の状態把握を行っていた。またデイサービスで知り合いが増えることによって、その関係性を通じた見守りが行われ、生活支援を通じたソーシャルサポート並びにソーシャルキャピタルの向上が地域の独居高齢者の見守りを強化していた。インタビュー対象者の発言を一部抜粋する。

「配食サービスを届けに行ったらいなかった。」

「配食を届けに行ったときに、倒れていた。」

「地域のデイサービスには知り合いの人が多くていい。」

### 3. 独居の背景

独居高齢者自身の性格や家庭環境など、様々な独居高齢者の背景が、彼らの見守りに影響を与えていた。もともとの性格に加え、高齢化による性格の柔軟さの低下、集団行動への順応の困難化や、独居になることによる自分の健康への関心の低下、また、家族関係による自宅生活継続の中止、などが起こり、アンケート対象者及びインタビュー対象者も困惑を感じていた。インタビュー対象者の発言を一部抜粋する。

「高齢になりかたくなさが増し、人の中に入れなくなっていた。」

「自分自身でも気を付けている。」

「集いの場に出るといいと思っていたら、施設に入ってしまった。」

## 考 察

本研究により、幡屋地区の独居高齢者が緩やかに支えられている要因として、生活の一部としての見守り、

生活支援としての見守り、独居の背景の3つのテーマが重要であることが明らかになった。

### 1. 生活の一部としての見守り

近隣住民が日常生活のなかで優しく、なんとなく見守っており、安否や健康状態を気遣っていることが明らかとなった。地域住民が主催するサロンなどの集いの場では、そこに参加するだけで表情や健康状態が把握できるほか、参加しなければ体調不良が疑われ、さらなる見守りにつながる。しかし、集いの場では、高齢者が集いやすい内容を企画するのに、質の確保が課題となる。同時に人材不足が課題として挙げられる。見守りについては、「農山村や地方都市などでは、自然発生的な見守りが行われたが、現在も継続されている地域もある」と報告している<sup>4)</sup>が、幡屋地区もこれにあたりと考えられる。雲南市三刀屋町飯石では、黄色い旗運動が行われている。地区全戸に「黄色い旗」を配布し、朝、玄関先などに掲げ、夕方片付けることで住民同士がお互いの安否を確認しあって、旗が出ていなかったり、片付けていない場合には、声掛けをしている。中山間地では、今後も継続した見守りが望ましいが、時代とともに変わりゆく生活スタイルと、この度の新型コロナウイルス感染の蔓延の影響により地域行事が縮小している中で、新しい様式の見守り体制の検討が急がれる。

### 2. 生活支援としての見守り

配食サービスや介護保険事業などのフォーマル、インフォーマルを含めた社会資源を使った見守りが行われている。配食サービスでは、ただ単に弁当を届けるにとどまらず、利用する独居高齢者の見守り、安否確認という重要な役割を果たしている。ただし、見守りを行っている地域住民と専門職との情報交換の場が少なく、スムーズに介護保険サービスへとつなげられているかは疑問である。今後は専門職と地域住民とでスムーズな情報交換をはじめとした連携が取れるよう、専門職側も地域やそこで生活するコミュニティにより強い関心に向け、濃厚に接触し、実際の生活もともに体験するなど、所謂、「地域に入っていく」機会を作ることが望ましい。特に、介護支援専門員は地域の見守りを有効な資源としてケアプランに位置付けていくことが重要と考える。

### 3. 独居の背景

独居高齢者の背景は、頑なな性格や自分自身で気を付けていたり、施設に入ったりと多様であった。元々の生活に加え、病気や孤独による不安から頑なになり、人の輪の中に入ることができなくなっていた。また近隣住民も気にはかけているが、自分が専門職でないためどこまで踏み込んでよいのかと遠慮する気持ちもあり、優しく見守っていた。地域の強いつながりで見守られている中で、逆に、独居高齢者の家族としては独居の親族が周辺住民に迷惑をかけることを避けたいと、本人の意思とは無関係に施設入所を検討するこ

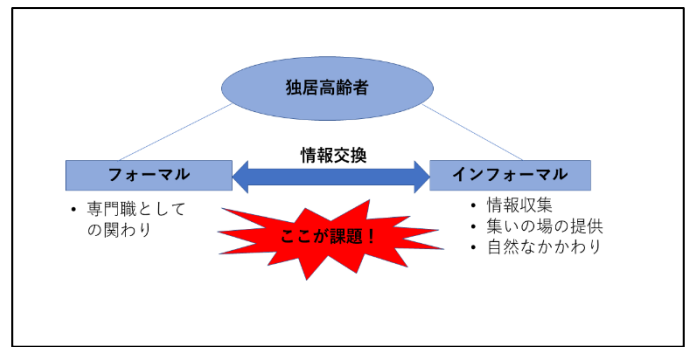


図1：独居高齢者の支援の概念図

ともある。また、サロンなど集いの場を提供することで安否や健康面を確認することができるが、集いの場の質の確保や人材が少ないこと、また情報交換の困難さが課題として挙げられる(図1)。併せて、個々の情報把握が困難であることと、地域住民と専門職の情報交換の場がないことも課題と思われる。今後は、多様な背景を持っている独居高齢者に対し、多様性を考慮した支援が必要な可能性がある。

本研究の限界として、主に介護保険事業関係者や自主組織構成員にインタビューしたため、幅広い住民の思いが反映されていない可能性が挙げられる。また、一般住民にインタビューをすれば、研究の副次的効果として、地域全体に見守りの意識が高まる可能性もあると考えられる。今後の研究につなげたい。

## まとめ

中山間地域の独居高齢者は、地域住民の生活の中の行動によって見守られていることが明らかになった。独居高齢者はそれぞれ多様な背景を持っており、フォーマルケア、インフォーマルケアを含めた多様な支援が必要である。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、ご協力いただきました雲南市幡屋地区の自主組織の皆様、並びに地域住民の方々々に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 幡屋郷土史編集委員会(委員長 荻田幹夫). 第6編 民生・社会福祉. 雲南市幡屋公民館. 幡屋郷土史. 初版. 雲南市. 雲南市幡屋公民館. 2007年 P297-332.
- 2) 島根県 地域振興部 中山間地域・離島振興課. オープンデータ. しまねの郷づくり応援サイト. <https://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/info/opendate/> 2021年1月20日
- 3) 小池高史: 高齢者にとっての同居家族・別居家族

～家族の多様化の中で高齢者へのサポートを再考する～. 老年学リサーチペーパー「社会老年学」  
2016;1:1-7

4) 杉崎千洋. 第1章地域包括ケアの理念と展開. 2. 地域包括ケアと見守り. (2) 地域包括ケアの一環と

しての見守り. ①見守りは変化. 杉崎千洋、小野達也、金子努編. 単身高齢者の見守りと医療をつなぐ地域包括ケア～先進事例からみる支援とネットワーク. 初版. 東京：中央法規出版. 2020.p9.

# How elderly people living alone are supported their lives in mountainous region?

Miyuki Takeda<sup>1)</sup>, Chihiro Watanabe<sup>2)</sup>, Ryuichi Ohta<sup>3)</sup>

**Background:** As the population ages, the problem of elderly people living alone (EPLA) is growing. It has been suggested that living alone may lead to poor health outcomes. Social resources may be scarce and inadequate in remote areas regarding the problem of EPLA. However, the current situation regarding the support and assistance of EPLA in remote and hilly areas has been still unclear. The purpose of this study is to investigate community support for EPLA in mountainous areas using formal and informal frameworks.

**Methods:** A questionnaire and individual interviews were conducted with 14 residents of the Hataya area in Unnan City. A verbatim record of the interviews was analyzed.

**Results:** Three themes were extracted: "watching over people as part of their lives" by making sure the lights are turned on at night and attending gatherings such as salons; "watching over people by supporting their lives" through formal support such as day services and informal support such as food delivery services; and "background of living alone" such as personality and family environment.

**Conclusion:** The EPLA in a mountainous area were looked after in the lives of local residents. They have diverse backgrounds and may require support that takes into account their diversity.

**Key words:** looking after of elderly people living alone, formal, informal

---

1) Hotto-Daitou, NPO corporation, 2) Department of nursing care, Unnan City Hospital, 3) Department of internal medicine, Department of community care, Unnan City Hospital

**Correspondence:** Miyuki Takeda<sup>1</sup>, Hotto-Daitou, NPO corporation [283-1 Daito-cho Shinjo, Unnan, Shimane 699-1251, JAPAN]

E-Mail : hottoman@hotaru.yoitoko.jp、hospital-soumu@city.unnan.shimane.jp

Tel: 0854-43-8008 Fax: 0854-43-8007